

「白河学」修学遠足（第2回）

日 時 平成21年7月26日（日）
テーマ 白河地方の神々の山と国見の風景
目的地 建鉾山（表郷） 新地山（借宿） 烏峠（泉崎）

建鉾山 日時

午前9時、集合前に欠席の連絡が相次いで、私を含め四名だけになってしまう。天気予報は曇りのち雨であったが朝から好天である。まず表郷「月夜見桜」を見に行く。思った以上の大櫨である。樹木医によるのであろう手入れがされ、周囲10m、枝ぶりもたいそう豪華で立派である。月夜に樹下から見上げると枝葉が月の光に塗れて美しい夜桜のようであったのだろう。勿論月は槻に掛けられていて櫨のことである。この地の抵抗する魁を征討に来た景行天皇皇子日本建尊は槻弓槻矢で射殺したとある「陸奥国風土記」逸文中の槻の靈威とも関係していそうである。

陸奥やふみわけみれば筒古山月弓桜澄める有明
と藤原鎌足が歌ったと「都々古別神社旧記」にある。

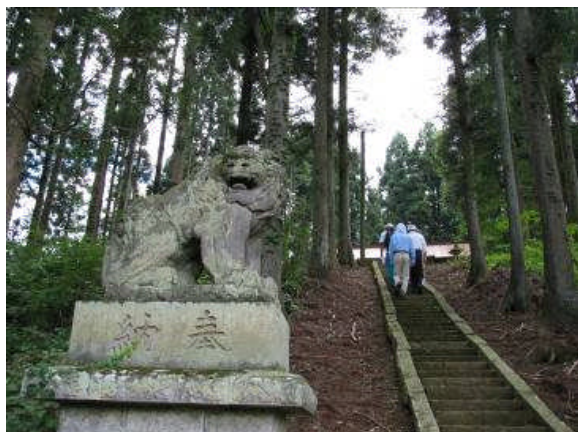


槻の巨木の隣に住む友人、Y氏が現れ、詳細に説明してくれた。これから建鉾山に登ると言う案内役をかってくれ、地元ならではの建鉾山の話聞きながら遠足となった。

建鉾山麓には2ヵ所の古代祭祀遺跡が見つまっている。三森地区と高木地区である。Y氏によると三森遺跡は道路工事で発見され、今は道路の下であり、高木遺跡は山頂から北東方向の直下にあり今は特に目印もないそうである。三森、都々古別神社鳥居前で記念写真などして古い参道を登ってゆく。巨大な杉の参道並木の下は薄暗く、足元の石仏などは壊れて苔むしている。直角に折れ曲がる所に古木の桜があるが周囲の杉や竹藪に陽を奪われて瀕死の状態が痛々

しい。脇に石の手水屋の石が傾いている。日本武尊の来訪譚の碑があるが「常陸国風土記」行方郡（6）には倭武天皇としてあり、「陸奥国風土記」には皇子とあって、ここの碑にも皇子で記載してある。拝殿をめぐる奥の宮を覗くとなかなか立派で鯉木の下に16弁の菊の紋章が夏の陽光で強いコントラストに浮き出ている。Y氏によると東を向いた社殿は珍しく、格が高いと三森地区を代表する様に説明した。また4年前に地区で費用をかけて整備したと言う登拝路を登ると高木地区からの登拝路を合わせて露岩の荒々しい頂上に出た。頂上にある岩こそがイワサカであり古代モノであったがその後神の依り代となったヒモロ

ぎなのだ。その隣に古い祠が壊れて地中に埋もれている。新しい祠が西南方向（たぶん八溝山方向）を向いて置かれている。つい最近までここで梵天を立てる神事が行われていたそうである。晴天で30度を越しているだろう。汗は噴出すが頂からの展望は圧巻であった。社川が潤す表郷の里の鳥瞰、国見である。あれが鳥峠、向こうは宇津峰、と各地を地図で確認。那須の山々は霞んで見えない。肝心の八溝山方向が樹木に隠れて見えない。

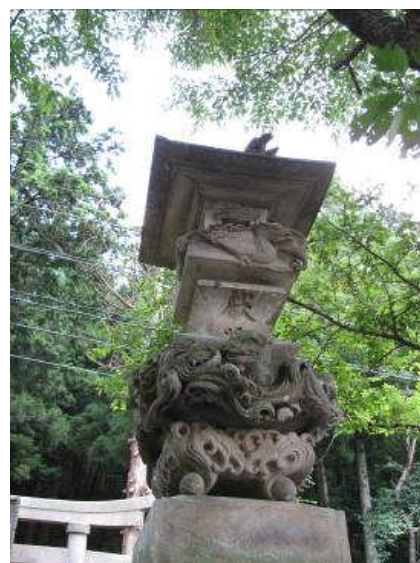


高木方向に下るとすぐにテレビ局の電波塔があって杉の植林地に幾本かホウの木が実を付けている。沢の始まりが夫婦杉の根元から湧き出している。日本武尊手洗場とする碑がある。高木地区は水に恵まれず水を大切にしている、とY氏が説明した。草原の中に顕彰看板があって駐車場にもなっている。北西に地図にもある神社が気になる。たどり着くとなんと、こちらも都々古山神社であった。こちらは高木地区の旧村

社、同じ神と山を崇め見た二つの村に神社と祭祀遺跡があったのだ。今は合併を繰り返し、白河市の一地区である。目と鼻の先の集落が競い合って神祭りをする、いや、せねばならなかったのだろう。月読尊碑が何体も古く風化し倒れかけている。月読尊を拝む高木村の氏人の祈りを想像してみる。この表郷の二社、棚倉町馬場、近津八槻、茨城県下の宮、(石川町、玉川村などにもある)は古く近津神社であったそうだが、明治期、神名帳ゆかりの都々古別は当社であると馬場(上宮)八槻(中宮)で競い合う裁判は判定が付かずどちらも都々古別社であるとされた。私は八溝山(1022m)を崇め見る古代里人の鉱物資源神や水、天候に左右される稲作農耕の神を共通項として想像する。これらは陸奥国一ノ宮の神なのである。

新地山

次に人忘れずの山として名高い新地山へ向かう。古歌や奥の細道などに古くから愛でられた借宿地区にある標高393.5mの白河を代表する山は県道から余地を残さず





石垣の壁で隔てられ、どこを登ってよいやら迷うがスリットを入れたような隙間が階段となって石垣に幅狭く隠されていた。登りながら石段の上に覆い被さるように巨大な石灯籠が見下ろしているのに驚く。すごい彫りの芸術作品である。その石段の上の広場には藩主松平家代々の顕彰石碑が多く、見事な彫りの廟は芸術を越えた石工の執拗さが見える。山への登拝石段の鳥居には「羽黒神社」とある。義経について共に戦った佐藤継信の母が子の冥福を祈って羽黒神を勧請したとある。皆でここでフルコトを語り、腰を下して遠足の昼飯とする。石段を登ると古い参道の標示石などがあってさすがの古さを感じる。松平時代に松茸の献上するための山とあるが今は痩せた杉が多く松山ではない。登るに

つれ山の地形がなんとなく人工的であり土塁風な、空堀風な感じがしてくる。金子翁も授

業で新地山は館跡である、と言っていた。頂上は古びた社があって裏の三角点まで行くと借宿や関和久地区が阿武隈川の流れと共に眼下に一望する。古代白河群がは目の前である。ここからどの山頂へ狼煙や烽火の信号を送ったのであろうか。神社の裏手の頂上は平坦地で自然に繁茂した杉や雑木で荒れているが、なんとなくここは古代の豪族の先祖が眠る祖廟の地、王家の山頂なのではと空想した。先年、越の国、弥彦山山頂で見た祖廟



の円墳を思い出したからだ。ここからも那須の峰々は霞み、見えなかった。正月に仰ぎ見た那須連峰の姿が思い浮かぶ。

鳥峠

汗を噴出す体で目の前に聳えた鳥峠へ向かった。地図にある南面からの道路は車で探すも見つからない。徒歩でしか行けない道なのかもしれない。北側の鳥居のある参道を車で登ることとする。くねくね曲がる細い舗装道路に行くが道脇は急峻に切り落ちて、この山が遠望からの姿とは案外違って急な単独峰であるのが分かる。次の



鳥居の先に建物や電波塔などが見えて駐車する。北側の展望台公園から泉崎、白河東部がよく見渡せる。神社を上って辺りを皆で溜息をつきながらうろつく。随



身門、拝殿、奥宮の素晴らしさに皆、声もない。辺りの石柱に刻まれた寄付を寄せた先人達の住所が県南地区広範囲にわたっていてこの神社の信仰の広さを思い知る。南側にも小公園や顕彰看板があって狼煙台として機能したことが書かれている。こちらから振り返ると神社は正面を向き、本来、南から参拝するのが正解のような気がする。こうやって鳥瞰する神の山からの展望は国を治める行為そのものであったのではと考えた。